

「出来るだけ価値観の違う人達と 知的刺激を共有できればうれしい」

みつはた ゆか
光畑 由佳氏

有限会社モーハウス 代表取締役

「社会みんなで子育てする」女性や社会の意識を変革したいと考え、茨城県つくば市の授乳服メーカー、有限会社モーハウスを創業した光畑由佳さん。「行動を見せることで意識変革に繋がりたい、アートのような気持ちで取り組んでいる」と授乳服販売を通じて行う子連れ出勤や授乳ショーなど、当たり前とされている社会の常識に挑戦し続けています。

光畑さんの生まれは、江戸時代の街並みが残る岡山県倉敷市です。「今にしてみれば、車が立ち入れない商店街が子供の遊ぶ場になっていたり、弱者にやさしくダイバーシティがあり、自分でできることはビジネスで何とかしようという素地があった」と原体験を振り返り、赤ちゃんがすぐに母乳が飲め、ケープいらずで胸も隠れて見えない授乳服を作ろうとした理由について次のように話してくれました。大学進学のため上京し、東京での暮らしを10年続けるなか「当時は子供を産んだら自分の仕事人生は終わりだと思っていた」と言います。結婚し仕事を辞めて茨城県に移り住むことになり、二人目のお子さんが0歳の時に転機が訪れました。公共交通機関が今より不便だった20年前、「子供が生後1ヶ月になって外出してよいとなり、3歳の長女の手を引いて東京まで2時間かけて出かけた。自分では大丈夫と思っていたけれども電車の中で子供が泣き始めた」抱っこをして外の景色を見せたりするも泣き止みません。「とにかく泣きやませなきゃいけない」お腹も空いているとわかったために最終手段として授乳を決めます。前ボタンのシャツで自分なりに授乳しやすい服装だと考えていたものの、子供は泣き続け、想像以上に苦勞し「一つ一つボタンを開けていく時間の忸怩たる思い。これから電車の中で胸を出すんだわ」と一生トラウマになるような思いをしたと言います。

- ・岡山県倉敷市生まれ、お茶の水女子大学卒業
- ・株式会社パルコでの美術企画、建築関係の編集者を経てつくばへ
- ・「産後の新しいライフスタイル」を提案するため授乳服の製作を開始
- ・自宅サロンなどお産・おっぱいをサポートする「モーハウス」の活動を開始
- ・2002年に有限会社モーハウスを設立
- ・2005年東京・青山にショップをオープンする



苦しさを抱えながら子育てをしている 日本のお母さんたちを笑顔にしたい

「こんな思いをしないとお母さんは外に出られないんだ。『授乳は楽よ』と周りが教えてくれる有難い環境にあり、確かに荷物も少なくて楽だった。でも電車の中で胸を出さなければいけないというのは話が違う」とてもショックだったと同時に授乳するという当たり前のことができない社会に疑問を持ちます。

そして「小さな授乳室」をコンセプトとした授乳服作りに着手しますが、最初は全く売れなかったそうです。「お母さんたちに拍手で迎え入れられるようなつもりで作ったのになぜ売れないのだろう？」と聞いてみると良き母であるために自分の我慢は必須で、子育てと我慢がセットになっていることが分かります。まずは日本中の我慢せずとも子育てできた方がよいと思う 20～30 人に授乳服を届けようと、茨城に加え東京にも店舗を展開し 20 年が経ちました。授乳服の良さを話すだけでは、苦しさをいっばいのお母さんたちの心に響かなくても、実際に授乳服を着て外に出て行動すると、「子育てが嘘のように楽しくなってもう 1 人欲しくなりました」とお手紙をもらうくらい今までマイナスだったことがプラスになる程のパラダイムシフトが起きるそうです。

従業員約 50 名のうち大半が子育て中の母親で、子供のいないスタッフも 2 名います。また、子供のいるスタッフの約半数が 2 歳以下の子供を持つ母親は、抱っこや脇に寝かせるなどの帯同型の子連れワークをオフィスと店舗の両方で社会実験として行っています。「よく子供がいると効率が落ちるのではないかと聞かれるが、確かに落ちる。けれども皆さんが心配するほど支障はない」大型商業施設に入るつくば店の店長が接客コンテストで 2 年連続の受賞を例に「初年度は赤ちゃんを抱っこしながらの接客で特別賞かと思ったが、2 年目は子供がいない状況で受賞した。子連れでも効率が落ちることなく優秀であることが分かった」そうです。商業施設の理解もあり、刺激を受けた別のお店が犬連れ出勤をスタートさせ、ダイバーシティ溢れる空間を創出することに繋がっています。

「今、おまごごとでお母さん役は人気がないそうですが、子育てへのポジティブなイメージをもっと広げることができれば」と話します。



センパイからの助言

Q、活動をされているなかで世の中に価値観を発信する時に気をつけていることは？

A、正面切って反論するよりは、「はっ」と気付いてもらえることを大事にしている。子どもがいない人、男性がどう思うかという点をとても意識している。子連れ出勤や授乳ショー等について、サブカルチャーっぽくアプローチしたい。笑う人は笑う、色物的なアプローチをとる。そのほうが傷つく人が少ないし、受け入れられなくても笑ってすませることができるのではないかと思う。

Q、男性が多い職場で働いている。例えば、男性が赤ちゃんを連れて働くワークスタイルがあってもいいのではないかと考えている。男性スタッフについてお考えになったことは？受入れる側の理解についてもご意見を伺いたい。

A、もちろん男性の子連れ出勤も可能だと思う。インターンなどでは毎年男性にも関わってもらっている。スタッフとしての応募があることも。店舗に隣接するカフェには子連れ出勤で働いていた男性スタッフがいたこともあった。けれども母乳があるのとないのではどうしても違いが出てしまう。その点ではやはり女性の方がやりやすい。受入れられやすさの点では、男性社会の方が理解があり、授乳服に対しても意外と男性の方が評価し価値を見出してくれる。女性は子育てについて複雑な思いを抱いている場合が多く、表面上だけでも素直に理解してくれる男性の方が楽な場合もある。